婆沙羅（ばさら）の時代

堤　勝義

(一)

此の前書店にいった時に、婆沙羅の題名のついた小説を目にすることがあった。そこで、何故、今、婆沙羅なのかと不審に思っていたのであるが、あーそうか、来年のＮＨＫの大河ドラマが『太平記』だからだと思いついた。そのせいか、書店によっては『太平記』（吉川英治の私本太平記）のコーナーを設けている所もあった。

今、書店にある婆沙羅の本は、童門冬二『ばさらの群れ』（日本経済新聞社）、山田風太郎『婆沙羅』（講談社）である。

日本経済新聞（六月二十四日（日））の新刊紹介の欄で、編集委員の浦田憲治氏が、歴史小説南北朝に光ー「ばさら大名」ーの活力を描くとして書評を書いていた。

とりあげていたものは、網野善彦『異形の王権』（平凡社）、山田風太郎『婆沙羅』（講談社）、童門冬二『ばさらの群れ』（日本経済新聞社）、童門冬二氏（ペンネーム）は元東京都庁の政策室長で、美濃部都政を支えた一人で、のち作家に転進した異色の人である。松崎洋二『足利尊氏』（新人物往来社）である。

網野善彦の『異形の王権』では後醍醐天皇を、山田風太郎や童門冬二の小説では、ばさら大名の代表的人物、佐々木道誉や高師直を中心に述べていた。

最近送ってきた『吉川弘文館の新刊』（新刊案内）三十四号（一九九〇・七）では、佐藤和彦氏（東京学芸大学教授）が巻頭の歴史随想で、「ばさらの周辺」と題して書いている。

佐藤氏は、吉川英治が『私本太平記』を毎日新聞に連載しはじめたのは一九五八年一月十八日のことであり、その時に氏は大学三年生で、早稲田大学の図書館の新聞コーナーでこれを読み、ばさら大名の用語をはじめて知ったという。

氏は、ばさら大名の代表者、土岐頼遠、高師直、佐々木道誉について簡単に書いているが、しめくくりとして、「ばさらに風流をつくすことと、寄合へ参集することは反権力運動の濫觴であった。内乱期社会の本質を解明する鍵の一つは、ばさらとその周辺に隠されているのではあるまいか。」と書いている。

(二)

ばさらの原語は、サンスクリット語のヴァジャラである。新村出編の『広辞苑』（第二版）のばさら（婆沙羅・時勢粧・跋折羅）の項目では「室町時代の流行語で①遠慮なく振舞うこと。②はでにみえを張ること。だて。③しどけないこと。みだれること。狼籍。④はば、またはゆとりあること。」とも書いている。

また、最近出版された『岩波仏教辞典』（岩波書店）には伐折羅と書き、(3)の項で「新薬師寺像の焔髪が天に逆立ち、かみつくように口を大きく開いた形相などに表徴されるように、伐折羅大将の降魔の忿怒相が極めて異相であることから、〈ばさら〉は奔放で、きわ立って異様なさまを意味する語となった。〈婆娑羅〉〈婆沙羅〉〈婆佐羅〉などを当て、鎌倉中期ごろから用いられた語のようで、次弟に、世の常道にとらわれず、奇をてらい、華美を尽して異風にふるまうこと、またそうした形姿や風潮をさすようになった。」とある。

前掲の佐藤氏は、土岐頼遠について「ナニ院ト云フカ、犬ト云フカ、犬ナラバ射テ落サン」と喚きつつ光厳上皇の車に矢を射かけ（『太平記』二三）。

高師直は「王ナクテ叶フマジキ道理アラバ、木ヲ以テ造ルカ、金ヲ以テ鋳ルカシテ」生きている院・国王をば配流してしまえと放言してはばからなかった（『太平記』二六）。

佐々木道誉（高氏）は「バサラニ風流ヲツクシテ」小鷹狩りをおこなった帰途、紅葉をめぐる悶着から妙法院に放火し、山内（さんない）の激しい怒りをかい、また「身ニハ錦繍ヲマトヒ食ニハ八珍ヲ尽セリ」「衆ヲ結デ茶ノ会ヲ始メ日々ニ寄合」（『太平記』三三）等の文を『太平記』から引用している。

幕府の法例である『建武式目』第一条には「近日婆佐羅と号けて専ら過差を好む。綾羅錦繍、精好の銀剣、風流の服飾、目を驚かさざるはなく、頗る物狂ひといふべきか」とばさらについて述べている。

南北朝の時代には、ばさら大名の高師直や佐々木道誉、また悪党に代表される楠正成や花押に特色がある名和長年等の生きた時代であった。

高師直については今迄教科書で足利尊氏絵像とされていた馬に乗って、ひげづらで、長刀をかついだ人物が、足利尊氏でなく、高師直であったことがわかっている（京都国立博物館、下坂守氏）。

高師直は、足利尊氏の執事として知られているが、もっと深くその人物像については考えてみるべきであろう。

(三)

此の時代の備後地方でよく知られている人物は、ばさら大名ではないが、現在の芦品郡新市町を拠点とした桜山（宮）慈俊である。

『福山志料』や『太平記』の資料を引用してみたい。

『福山志料』巻之六、人物所載中の桜山の項目を要約してみると「長谷部昌益聞書というものの中に、桜山はもと宮氏で、地域の号によって

太平記には桜山入道と記している。実名の慈俊は陰徳記に見えるという。」

さらに続けて「太平記には、吉備津宮に、桜山慈俊が火をつけて、自刃したようになっているが、六郡志には、館に火をつけて自刃したのが、風が強かったために、吉備津宮に類焼したのであって、太平記の作者は遠くなので、風聞をもとにして書いたのであろうと書いている。」

『太平記』（日本古典文学大系34・岩波書店）の桜山自害事の項を引用すると「去程に桜山四郎入道は、備後国半国ばかり打ちしたがえて、備中に進入し、安芸へも進入しようとしていた時に、笠置城が落ち、楠正成も自害をしたという風聞を聞いた時に、皆戦線を離脱して、残ったのは一族・若党二十余人ばかりになった。そこで、もはやこれまでと、当国一宮へ詣り、八才になる子と、二十七になる女房とを刺殺して、社壇に火をかけて、腹を切った。一族・若党二十三人も皆桜山の後を追った。」とあり、何故桜山は社壇に火をかけたのかと続ける。

「此入道当社ニ首ヲ傾テ、年久カリケルガ、社頭ノ餘リニ破損シタル事ヲ歎テ、造営シ奉ラント云大願ヲ発シケルガ、事大営ナレバ、志ノミ有テカナシ。今度ノ謀叛ニ興カシケルモ、専此大願ヲ遂ンガ為ナリケリ。サレドモ神非礼ヲ享給ハザリケルニヤ、所願空シテ打死セントシケルガ、我等此社ヲ焼払タラバ、公家武家共ニ止ム事ヲ不得シテ如何様造営ノ沙汰可有。其身ハ従ヒ奈落ノ底ニ堕在ストモ、此願ヲダニ成就シナバ悲ムベキニ非ズト、勇猛ノ心ヲ発テ、社頭ニテハ焼死ニケル也。倩垂迹和光ノ悲願ヲ思ヘバ、順逆ノニ縁、何レモ済度利生ノ方便ナレバ、今生ノ逆罪ヲ翻シテ当来ノ値遇トヤ成ラント、是モタノミハ不浅ゾ覚ヘケル。」

先ほども書いたように『備陽六郡志』は『太平記』の作者は、遠くなので、風聞をもとにして書いているのであって、吉備津宮（備後一宮）が破損していて、自分ではいかんともしがたいので火をかければ、新造ができるであろうと桜山が考えて火をつけたのではないと、これを否定しているのである。『備陽六郡志』のほうが正しいと考えられる。